

いまも、 共感と感動が

映画

「ドレイ工場」上映会

6/19 土 15:00~
仙台弁護士会館 4F

入場無料



主なキャスト—
宇野重吉、前田 吟、日色とも彥
杉村春子、北林谷米、中原早苗
志村 喬、花沢徳衛、鈴木瑞穂など。
総監督は山本薩夫

10万人の労働者が作った人間ドキュメント
笑い・涙・感動・勇気をふたたび

映画「ドレイ工場」

映画「ドレイ工場」が完成して40年がたちます。
「えっ何？ドレイ工場って」、素朴な疑問がでますが、それほど劣悪な環境で働かされていた職場がありました。「今日の方がもっと劣悪!」と思わせるほど、収入格差と地域格差によってワーキングプアを生みだし、長時間ただ働き…と働く人々を追い込んでいますが、それは40年前の「ドレイ工場」の時代をとよく似ています。

当時、“東京中争議団”といわれるほど企業閉鎖、合理化、解雇の嵐が吹き荒れていましたが、一方で働く者が人間らしく生きることを望み粘り強くたたかいをくりひろげました。それが映画の原作「東京争議団物語」となり、さらに映画のモデルとなった当時の全日本ロール支部（現JMIU）のたたかいが、労働組合の結成をめぐる資本との熾烈なたたかいの象徴だったのです。

また、映画界も多くの困難を抱えつつ、労働者を主体にした健康でたくましい映画を作ろうという、多くの映画人の思いと協力がこの映画を完成させました。映画人・俳優の良心が、スクリーンからいまの私たちに多くのメッセージを語りかけているようです。

「ドレイ工場」上映と現日本ロール支部川田書記長のお話とあわせて、「人間らしく生き、働くこと」をご一緒に考えたいと思います。ご参加をお待ちしています。

ゲスト

JMIU 東京地方本部
日本ロール製造支部

川田 泰志 書記長

私は1988年に日本ロール製造に入社しました。毎朝送迎バスで正門をくぐると、赤いハチマキを締めた大勢の人が「千葉委員長を就労させろ」とシュプレヒコールをあげていましたが、当時の私には、何をしているのか分かりませんでした。

2002年5月、パイプ工場の生産停止に伴い、事実上の解雇をされてしまいました。従業員組合（現JAM）に加盟していたので「パイプ工場で働き続けたい」と、書記長と本部役員に訴え、会社側と交渉しましたが、「雇用が確保されるのであれば、身分は正社員ではなく契約社員でも良いではないか」という耳を疑いたくなるような意見が出てくるありさまでした。

そのとき初めて、この組合は御用組合なのだと思いつき、他の組合員も引き連れて、全日本金属情報機器労働組合（JMIU）へ移る決心をしました。

一昨年、完成40周年上映会で「ドレイ工場」を見ました。働く仲間の不満や意見から組合が結成されたこと等、組合に入ったときの初心を再確認できました。

争議のデパートと呼ばれた日本ロールは現在、組合員20名弱。「このまま減少していったらどうになってしまうのか」との不安もありますが、たとえ少数であろうとも労働組合の存在意義を強く実感しています。